岷江入楚

和書門 類
二七九一一 號
八七 函
一三 架
五四 冊

内閣文庫
和 書 類
二七九一一 號
五四 冊
二〇三 函
八 架

内閣文庫		
番號	和	27911
冊數	54	(25)
函號	203	28

国立公文書館 National Archives of Japan

大日本帝國圖書之印

明治十三年購求

国立公文書館
National Archives of Japan

螢

源氏卅六歳　大政大臣

玉鬘憂君思煩給事

兵部卿宮参面對給事

源氏君聚螢放垂衣袖給事

五月五日出馬場殿給事

騎射并　競馬事

源氏君宿花散里方御物語事

永雨中御方々競繪給事

源氏与玉鬘御物語給事

天台御文事

紫上為明石姫君又競物語給事

夕霧中將常參明石姫君御方給事

太中將懐念玉鬘君夕霧中將御中好事

内大臣夢不忘撫子猶又見夢合給事

日本政府図書
物語
引□文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

螢　花　似羽并鶉居巻之六　拙日

何 羽にかゝる術もとさかるまこの夕つゆとおもひ侍りしとき
声に数へはなし身とのこころに螢しなくて何とかうちよりかまいらしめ
むし 源氏廿六の巻月の半人々照の並なり　拙日
并 源氏廿六帖の夜なり

今はくおもくしき　拙 源氏の今ハ捨改しまさん御あもく
しきとは云へされとも旨は大臣に見すゆるすらむ人と
天下とハ掌に入てまします人
つしやまおおけ声つゆるる　おとくしくし物語つゆへに
源のうろくしき此あらましけしもかさんかめくし
ものゝしやすし物語まつる人て　源の行よし人至まつる人しも
随念声つまるしく
これおりうち傳つり　拙 六条院のうかれ人
源の所ひかりよ寄しおふまうかまへおん事とたえしより
ましよりしりし　その事ますらふて宮つね念へ身
よしつゝしねハおうろつきさふらん
あの姫君まいりしおかしく思ひの所なり
むし 是ハ源氏のむかしさなけと宮にまするハ小蝶まこの奥へなかすへ
拙 あの姫君ハ至うへまろはる源ともそれし移つらうり
かとくけすふうすめるやすしきしん
彼まんつうしくし　肥後国古文照草ん

秘 源とよ文盛するものとらへよ立よりさしすぐれたる事は安抵すべしとぞ
うるはしとらふよりけても人の 秘 実子の心をつくし思ひまはしけるとぞ
心もしようしましくし 玉へつしの也へ
盛ハ女中のあはれしきさためとあるし事ありひとしく清し皆也
ハ源氏はさらぬ事もなし人の思ふよ下のはしましらへ行き事とも
すべしいへり
行くすゑもおほしける 秘 玉鬘の事もおもひけるにつけたるによし
あはれなり
しく見るのありけまし
又らうの人し 秘 夕霧ら人 名たゝかす所に父息とおもしとりしおて思ふなと
かしこうらかなるあはれ人
秘 大臣の松のうしろの末のまとふ人えしたり
あしさましをたてしよむし描つるも行く 箋 気色とらも給ひしに 九條抄
花 あしさましく給ひしに中之時母なともとなめす
私義にハ清濁の数をわけ来川見る者ぞ何も可拠之
花 をもやうのありしあはす 人のうしも思ふまふ有へ

秘 玉つくしれや性をよく年あしらひ侍へ
人さまのうつしらうよ 河 新へ 花 みてこやうあるらむへ
秘 うこやうよ人おもひよきさへ 箋 集川見るやもに
いとしまめやか こゝろしるへし 箋 花紫の
花 実はしくもれとも我見殺のあはしく
告りてあるとの 黄なる之
ねらしのおもしにいくつかしね 河 横笛れ之
花 かつらの蔵なしいふへしし
秘 らうしハ蔵人にあらハ告りてまへハ年者帥してよのことゝし月と
短くいひよるしまの御らしハなりけれともへ 箋 ろ集より
日 年月と経ますふしハ有るれとも
こゝにれよ於わかる見えと 花 風雅親王集に九条太政大臣の心見えぬよ
おもしろきにゆくもうみの堂月日ハ見せと文月よるさへあやにまさる
うれしき月ハ嫁娶といいしむなと見ハあ月よするねこうらこふる也てさとしの 箋 花
河明集に神代よりいひとゝもなる月毎なむすなかへとこうらもうあるの
うかふ歌文つれハいつくハもと人をうめ月毎しうかよふると人のありく 大尽へ

とり給ふにこそやさしき宗祇ふかくも久しくかねたきし
郭公なとくるをもしくぬれつゝ月雨なとすくしく世にあはれとも
冬の夜よりあかしきまて白たへし行も人ならく色さかしきあはれ
この月雨といふもあはれなる人
今案 月雨ハいむ月なるを色は皆とすくなるとこの月雨にみえぬ人 よくよく之
弄 月よりハあかつきね枕をやすく寄すことも花のあるゝこと
秘 月の中ハあかぬ枕をさへつゝ月といむしも花あるゝゝ見えしかり
箋 私勘 異苑云 没後五月為悪月故忌之
とらしき事からうさ
底ならんしし　源ノ　秘 世のすさましき事ハれ久すり
すさしき給ふへしあまて出るありとしすしき人くれはくさく此世ハすり
みさうなら　河 帝範云 是寒時也紀
人くもとに色人しとすく　さかし婦人とく
秘 あさかほの此方より給ふつき人もなきさしく
とし君の此なからすくりし
秘 夕霧上のなら八父三位中将といへりしか 宰相なりて官宰相なりしの人のいとめ人之

その娘今宰相君といふ夕霧上よりいとこなるへし
秘 夕霧上とハ三位中将の女也兄弟宰相なる人の娘なり 内大臣のむすめ之
私 内大臣のいとこよりハ何しれ夕霧上のいとこ人
三位中将　夕霧上　内大臣御母
宰相　宰相君　あさかほの兄女房宰相なとにてありしは人のむすめ也 さしく人の何しらよ与りそうけしと人々や
見しおくしと案する給ひくるゝと有よ
只とすて文の此えつきん人と正なる人 嗣と源の宮にしてさと給ふ
此すし宮なる侍と　弄 源氏家すて文の此のすり人さ侍すし薦 よく人
秘 源しすて文し何すりも色さしたすれし好色の此方ハ色侍
給ふくとこの地宮なさ侍ハ此しさしく
うしろてしのすけしきのくらハ　あさかほの色人
秘 源の色けあつく此のまへ人の色あしすて文のあるし宮なねつく覚えとく
行しあるふよりハあるほつく色つさ此新しきみんね
あさかほの色れらとも何かりしさ物人源の此あさうりともおほれさとあ
あしく人行しあるふとしよりハあしけしハしとつうさしまるとも
行しすふ所すりあし侍しく

爰ハあいなくかのせんし奏さしもしはてゝし
花 此一段の詞いさゝかきこえかたき源氏君ハかの三条さしもはなちてくし
うへもみえしなりしかうらうしさはらぬのことにみえけりもの二人の宮
にまつりたまふよしありしに心うく思ひけるおほしつゝきこえけん
秘 宮も女の事いとゝなんとおほさまほしけり
紫 源ハ宮のことをいとほしくおほしけるに我身をかけてほのめかし給ふ
まことにかんなり
私かのせんし奏さしましとハ宮の女御の事さしハいたく給ふへきとし
源の君に思ひはかりに宮をハ女のけしきにほのめかし給ひとおもひしと
宮もかくまてはありと思ひつゝ此うきものゝおほしめしたるへき
いとおもひやるまゝならんしけり
宮のまいりのほとさしなとしけるに
花ハ宮のめのうちをいひたまへ　宮の女御
紫 源のうちおほくこそあるまし
かくれたりしに心のをすくさせ給ひしとに
おもひはかりしかりけれ　花 源おもひかけぬ宮のかやうにさまもまことなとへ
さりし人　とゆうくやうとゆうかなりけん
蘭 三ト子へ

むりせさりし
秘 源のつくれなりけん
宰相君のかはりいふかたかし源の宮へ
いしさまよりもののかはらさひ
新 源のうちわけへ
うちくおもひしかりしかなしき
宮の女のさまにて　めく
おもりしきりまうちの宮のにいかにしかしさまなり
うちはかの君の
秘 女のけしきとりて
花 思ハ女ハ宰相君に宮へとけり
ことわりにしくしさしくハかなし
好色のことなりけれ
実にしくもこゝろのさまへ
おもいしおもしけ
源のこゝろへ
宰相の君の御ありて
秘 女の御消息をとへりもとなり
いかにいかにすけくて
或宰相君にはさもて御ことし
ここらかくとかくとして宮にまかりなへ
源の宮にまうてもと宰相君にはなちての事ありしといへ
いしをかりありけり
秘 思ハいかに源の女別の詞へ
実此事よ日
或いハかりしさしまよえかゝさはかりハおもひくの詞へ

と給ひのとこ海にまさりしく　秘 されはくのおかしくにまさ
かしく給ひまさしいまみつきへいふ事しかはりしもれらにまか
色さすみえしはそのきまし人
めう思ひてあしくまみえ　地とこそ宮ひかされまし之
いとうすくし　秘 玉かつらの色人
こゆと給きしとものいへり　秘 源の車人
とへりいそく
まへすいねへけれはしつりしくて本すめりしましおゝまみ人　玉かつら乃君すりにゑ見と給てよ源氏のこひ
なまよろしこともなく給ひへん　蛍 しをすきなむつしとは玉かつらの
君の子乃なむすとやすくさうしいまみを思つうら給ひしとゑき
源氏君の奥のこと本すのりしこまうう給へつらひしとうらあけ
まみていつる人
秘 子のなむすよ思ふこうしいまみ人　河内 几帳の帷はうすきすう物人
蛍をうとさうるこの夕つくし
表ハ綾裏ハ絹又ハ中浮とも　うとさうとしは　裏のうすり
来舞記云しらき扇とよく乃書　紀判当浮よ以車を女車

しかくうつきしとまくをまみとめく給ひさうりつのいてるおう
をとうしし女車よ入さうり乃御以蛍のとかれやうくさかえ人とさ
蛍火とみく女御さうさ以下の例人
案 うつ御物語と人いとしけすけしのきめうん中へとおかしとにめさよ
すゝしとあけりよしりとはあのしいさま南しとおかしうかんし集か
蛍おもしまと御為さうまこそは給まつくしいおうしく
うへこ達か出るに物いはへねつりしと給ほして色らさまうつる
みすとうしへて此紙よ依にこし此ら人をうるよおもきこあらん六よう
如へきれはいふしとしりへやまかつ蛍をとつしりかよ世をし
給ひつ朝としとうりへ秋色へぬまいさまつしねうらつりしるう
まきへ以郎良はしけ給ひうちなへしある野のうしくの葉めまうう
よおつさくあひくのかうら御をしへるくるす御しの紙うり
給ひまてとらく多くしくうる所にたうてよ蛍を給ひをすうり
うそあく何よう人いふてそく此ら人しつくまくまかしの此紙よ
う給ひうつて給ひこへしこくそし多く物く御給のをと
のさまつしいますに本すめてさいうとうらけ給へくりの本すし乃

まつよ此物語のこともゐけしらつれよ空蝉とさしまをとし給ふとく
するしうちてつきすへハさらうらとりのゆきもかりけりそこつう
給ひしまゆへハ御方そうくさる今案うつ此段の空蝉を御つくえ
ゆうとりの中宮よしの袖よつうとしさしま給ハ内侍のうく
乃なり姿とを給へんとしれもかしけしくへ秘めくへハ車風白桜
の巻よ空蝉そりかりしそを思ひて後まつ色まへよおなし
かへし又此物語ハ源氏君の空蝉をおかしく給ひしくかくし
まかもあかうしの君御占ひまめよ人をまかりし源氏をましとハ
給ふへしとおすつうとへ摂蛍とうしとうくさよ此夕給ひしハおおく
つゆしおりうしと代 河海ニ 凡様の椎ハ二重なる也なり
表ハ後裏ハ彼又御中信まうしとさうてさしハ裏のうへしとる
されかし末丁ハ椎及ハ表裏ともようを地へ但末丁ハ椎
よタつうさうら空蝉を給うとおんすハうかやとうへさすよ椎を
うとさりしええしまそれの袖のうちさうしいかるや椎しへハ
うつかの袖さうらとその色けしてまの羽よかりのまくまきさ
らいしてりつしつまハかのくまつしえしし源氏の袖よ給へと

秘 給へるを引よせて給へし色好給へ人よいとしらしいかうかゝ苦
花宴の後捨ものし
細川流本丁よハ給ひこて至らうし只空蝉の袖ゆへ給へえし
さしとすらまよわへし此事て捨しつゝうかめ物語にも空蝉の
袖よ給ひこてる しらうりまえ比かあるタつゝさうつ見えしおかぬ
見えし
きうえん毋　揩要えん　わしいへ
わかう御さしうしまへるかさりしか　秘 まうしへ
おしろくしきさえん　源のうくぶひまふへ
見そのそうき　吉うてえあへ
きうしとめし　秘 此文ハ源しとおし すまありまう
てうくんとしめらく宮まむすうへし
いとうしゆくしれらんハ　秘 源の色よ奥ふうし出給ん
源の人告うて文なも源の北女といひかし色とうしか給へこまたく
ましゝ白うてらすしゝゆくいさしんとへおおわさしし覚えしき
うてしよ志わくき給ふにへいよく人をとしめさきんとん

まことの親姫君　抄　是ハ作者の詞也姫君明石姫君也
秘　若子也実子の如く姫君を思ひ給ふハ心ざしのふかき故也
よろづのやうかはりて見給ひ出して　秘　源の御心を給ふ也
抄　是ハ一
是ハ人のかたちえらひて
人のかしこきハ源氏御中よりはじめ女の御方をしへ給ひて
むかしもかはらずとて見ゆる也
ゆかしとおぼしき　出で来て女の心也
むかしの事をおもひいだしてかなしく思召す也　抄　見えし
えらびしねたしともかくもかはる
ひとつまじりつゝ　一間ばかりの
かのくるしき
第　神代の詞今の世に似たりかはりしかのなる事としき調のさま
ほのかなる事　香炉　あかく
秘　是さへ定まりしにけりとぞ思ひつゝ　ちの一所にとゞまる　香炉

久しかりける人の後もさしかくして
御悩の年よりしかるべきものなりしかど後のまゝと今に見え
そひやうなる時しもよし　筆　大方のさまなるべし
おのづから　河　如菓人
秘　菓のしるし源の御事よりかはりしものなりけり
蛍兵部卿宮　○なつかしき思しきこえしねたし　のなきものをも人の事かはりかはれ地かは
玉　すくよかに思しねまじなはせ蛍兵部卿こそ思ひかけずさかしき事かはりしもの
秘　次人のありしハ兵部卿宮さへつゝましきを深くなりまさりてしまひけるも心あるべし
鳴るとしもなき世の事さへ消えて来し人のうつりしかりしくしけれ
ありし世の事ひきかへぬや
秘　久しくも見まほしくといへしくしけん
うとましの中にしと　秘　遍
ひとさはりしとて　行かひにかよひしてはつかなる
玉　契りのふかく身をかたしらぬ蛍兵部卿宮の事をいひそめけるかひもなくなりはてゝん
抄　人々ありしも御らんぜし女君の中にも思ひて見給ふ契りもありしとねたし
の思ひこそ神まゝかはりて女君の心ならず思ひしもあはれなり蛍兵部卿宮の御
かしつきにハ女のかゝるさまハかくもあらず

秘
ここに些しいふハ處なりまたそろへしされハ前代あるね古今の思ひ
より深くかんし此を此と定ハりく斎すしらしまてハいひ處
ことすみことのうろつきしおさへいふ人 此第四集を伝へし仍其中しきこえ 其第八以集仍有り——
第 紀氏集花為并 秘ノ第四ノ下ヨリ先いふし古地ハしらふおもくこ
ありしすまいハ此世をさへわの営みにようりしすつく言よおもて
いつれ前しもしぬしそていつく伝田の此うきしろぬと
いふと些つへ定の人のうつよハころ一つ地ゝりしころよ出へく寄ハされ
ましていふの深さとしハあれしおさへて越つゝめつく讀給如くし
又一首をいつり些つすつしめしこゝもちろすく寄りすてしるく詞
めくうれハ些つてよハちろ合をきし只営のよりつと云男り
いつすもやこを待ハ声るめてゝ鳴きょうしいもれしし此つよりも
又営しより此より伝まる深田の此つすしハうろへし営のとを
をしもろうてとらうすりよ言へり給すらし雪も言中に定の
人のうつりし寄よハ中くゝろうて深さとしと云白ハ自他よこりゝへきゝ
言ホ之行れ紙を自然也 紀伝拾遺源重之営を讀なるしへ
言しをし些すよりゆうヽ営をつ 鳴声よりしてあゝされすりうき

此集を撰出して或地よ寄せ出とし集を撰へしゆる後の人多歳え
いとろうつよ 花りしうろらつよりし捌しすかへ
秘 ちろうろよすつうしを撰し給へ人地をさ捌を定れ根と給へ
第 女君のあひしらいとあそくよ定の此ひ給へ
とゝきくしゆ捌すれハ 定のしとる奥なりしとちゝ海つ捌用捨へ
引の乏ひくもろうしされ 此の京言へあ月夜てしゝすつへす
何らすしうこへ
秘 寛すりゆすきれハ秋夏へぬきろよりしお給へ
ぬれくろし 所収月交寛和三年夏後雨中電
郭公すしうすしれ
云 さゝこされよ地此ひおもハりしおれ秋ゝへく鳴くいろう引らん
紀之節ゆゑへくの詞といひ川前伝よ朱点を続け付らんれ
郭公うちそうされ無りしとハ些つを定の此るの外しを郭公よともし
必とおと讀すよつさすをいつうされもまとあられハ些けるうり
乃しゆしへ秋ゝへくおすよに付て古今のいつら行らんの斎を
思ひもとしかくあるへく些つ定の心深を寄すし待らんとい
とゆりしおれよとをしいつうしも拾遺とへうされ

秘 此段ハ筆者此人古今の女房に也是ひ給まもの事の色もはる
物かりひのうちまようとしてもを給ひける人
此秋の景色時分の明つき所かくそこく人やうし見事とりし
実とめてし給ふ人も面白し　筆者此人
紅葉一色　山鳥　曙　雲外　万點　水蛍　秋　草　中等に害法
おかしく清こき事をとおもかけの時に一部ノ明人也
引しみ人のさ夜此清かし法ノけも面白き也
此章しいたしの方もやかしさハ　秘 文は源ようくかけけるしく
もんハりしかおや　たちし　妻女なとのあり
秘 母のしくようもら給ひしけり
うちくハ志うし　弄 源氏の父宮し給ぬ事とそしぬ　秘曰
第三紅葉不審　源の御心のまゝありし一段とそしくそうと
志しね人　秘 実もし侍る也し
うちくられ給ふ此章々と　秘 人々見給ふつくもしハ物かひくえ
まうきかうしのうさそうし　河曰 人の心浮世中ともて章けし
人のなめかさんかすしうちしん

わやうしよ志うまよまり　実ハ父母すしよ志しまさりまし
久ハそうまししさししかりしん
人おかぬうち良まても清めよ世こさうやすんし
秘 今出こうしの方とか母ハ子としいもちてさやへ　源の実子ハ桐つほにあし
うちくさうしあつしさうの事おもしね也ハ人もかすと思給ふへん
まうハ後とに中しき事をさ　花 源氏君ハ出姫君よ源ハ御文
てもそ人しおひいまてし御心のくせとし　秋好中宮なり
此も一首かうハヘるしまとしまへ筆すり
源の御心けれく家の地よさくさしハ人さうと女給けるなりへ
源氏の天性の心くせくとよん　実曰
弄 筆よ出かうしのしかみえと之給ふけるやしひつ　細道
わつ　弄 筆ノ筆なす　おほつかなし
中宮なり　秘 秋好人
けしうかもし　実 家の色ともすれてハ思ひ給ふたかすり
働人しもさうこの　秘 中宮ハ世しつらすし出つらのふうしあい
えし給ゑたまうしん

こゑ君は
あさくさしくしつて　字源の角捻にいふすゝ解へ　むかしのゆかり
せうぬいしめらの様にしよ　る湯文は良時は廻殺星に以方へ　拙日
茅子地气
貞 東の町に北西の對よ起雑劣る様いし頼よる湯たるさ有へ
流行るよまより様にて　或し女衆に角よはる傷ることいひてつこまされ
起ろつり明まし候こさ有れは源氏湯に様の人分人文海すよ流語へ
和公るゝ文あるしましらの時の詞文屋しもくとるる四ケ六
夕闇もしはさる人つ称と四ちは夕月夜のやりしおうしすり也へ
又暑もうらる気の解夕雲きも包く侍らく菊しるる
いうまる文めき秋や梅し給ひし　拙 よ人の文のすゝとよい経へ
いさしもすしとくしもうつしさるまい
拙 花しらる音気しとむしへ
人そんもやかう也のひやまらこと毎しき人す　男女のおもいを
たすめし人男女のとよおく乳色ね人は了さ也そしへ
貞 いは流つこ殺流しつしく詞へ
い音と出流しこ

茶よ以文さらとさへさしくすらいる人流しよ常しおふさもる
来へうしし室かく又多からくはいくもすし常し執らし
さ音そいらる人さやし室へつさしいひうる流し宮ふとは云へ
いましめ　　誡　　警へ
流行もいろいろにありてはつりそう流行なる　河 嚴て　又光ッて
貞 流行は文の部よある他へ記うまし出つきよつの等於にとへ
拙 数色と色流行しおうとし　流行は文の部にしよある他へ
宗 流行はきしすしる歌乃縁情へ　今世話かる人とゝ云也へ
此世人のそわいうし出もとみへれ　かし添らるとも源の
元様文は別しきもみ思ひらなへ　拙 菖蒲はいろわきしてあ月
常にきも人ねわやかも
五日よはのをえしめつしもしされとうとしへ
拙 詞流く身様積へ添の年といろくようくしまつきうしよう
おしんとらくくつしよ出る折へ菖蒲花小様すゝ也なまと
五日には別しきをそつる人出へのりし明し　よしまはるとへ

異 おし用ゐ菖蒲ぞしらせてみつ

弟 又拾遺集人今何集書にし 又新勅撰集

秘 此集菖 壺 秘ノ弟四云あやめ御菖蒲は

源氏ちくさにみえけり五月五日菖蒲は又もかくし何事たれ

ことさらにしめるにかねて此六条院のさ花は常にみえと

人ね菖蒲とてさかつたは昨日よりけるこのあやめかかかり人と

よろきうかい御玉かつらの君にかかくすかへしえ玉菖蒲乃玩

をれは拾く源の花の装の五月くあさ花ますかへきともなの

時は弟の詞に涼やしこかいうしすの時そすゝし源氏衣装

れをさしと御かひとうにと詞の末しるあへし常のさて人ね

時その五月しさあり二人めつゝくはおかしきえしと玉かつらの人に

めく拾ふさすへし絶しは此何に菖蒲をは白しますとし

あらへさえ絶るは異ノ弟にいかへきん

秘 此かうつの色人

ふかしさすくは

源の好色は心むかはしかしれとさり

或日

実女粒に源を疑の根よりおもしし実父内大臣の女と知り

まいく源へすいんはおかしくかくさしふかめる色ありす

文よりゆへき 是かへ文より玉かつらへ身ゆえ

さうなうとやしますく 秘 菖蒲の根は長きさゆへいしね

菖蒲の根に拾へて根前うしもおかつおあやめの涼のとうも

秘 むしとうし拾へり

けやめの根より女からうる

秘 あらはれそうもしりしられまに拾いおもはしとかる本 見しや

草子は此へさめおの臭ようすしも清しくられはさしもなくきす

なりあきこしも世上一の相しへをつまり

長かりし 山ふきやさく人へひすさとうくれよおあつるあやめの根のとやうれん

川人へしすかとうくれとは色をよ人へひなさ身とらけくらへん

あやめはふかひうりし我はうふも色いまにとへあやめ根を菖

つりうゝくへうあり

ゆ 清に今あるく

るかへしまし川 長くへさ根より

長根 弟 長根のあやめ人

こうくれてあらつゝ五月のあやめ草よすうさたかし又人はかうすん

今菖蒲ならぬ根よしといひ侍らるは根はあやめ草の事なり
（秘）なをしらべて見しね後ありやと申さるなり　それやめれ根のちきりも見えし
一段とながき根なるべし
うきは見えどもならべてよらへられたいふしもちきさんためにし
このねたへりけむしそのしおもふしおもひね
（秘）源のいまだ給はで
あらへ出へよすのよしもつきまでありし源へる湯の気へむ給へ
（秘）入てしやまとへ
ことまうれて
御気もしいて　（秘）もいりしよりと志すなへ
○（とおうし）けうしうえらいとしおさしとみあられけやめしまいありれる杯よ
（玉）いひやめしまうれは古今とあやめと思ふね意へもとらうれの
けやめしけしあやめもしまうねは河のふかしなきさへ下り根一字
まつ菖蒲といはすしらへ見ゆは其ことうれの根をれふうら
ぬし思しくなしうら給へ
其のおりいのふ別あきとしや　あやめしうれともそふ
ましへうしのすへは出うてあさくらゆうよしへ　菖蒲は長し

（異）そのとまうしくしうらしとへ
（秘）うくしのそうきはまうしくおさとへ其の強しすふ羽へ
（む）久羽へうくしの羽いひくうしゆかしてはれけてま面白きとも給へ
ともいまれうし　（秘）玉うくしのもの給へ
あうへ其れあふに給へ
いさしうあうねしし　けうねすしは不見るよひすへうらへ
それあうねしくしんあいらへしとは其れよりしねして見ん給うへ
とゐすかせりしおしもうしく　牛ある羽之
くとまうし　（第）秋菜玉としおうともうや縁未詳可為定
（は）續命縷女　異條　釈菜あしいらへり菜玉の梓へ
宋書曰元嘉四年　彭　夏至日五綵縷し扇　金門歳節曰端午
本盛芝酒以菊花洛楼上採艾　採百草結二綵縷道 造り 續長壽命玄令菜玉して投へ避兵
己佩霊符よ續命縷長　文孝端午侍御紀云延喜十三年五月五日
丙午縁形奉菜玉如常　擬去年九日菜萸以菜玉挿替着御柱前例へ　延長二三年五月五日
丙申書司立菖蒲瓶縁所奉續命縷如常　五月五日
桑形菜玉供出すし菖菜　擬しまし以候未柱よ結すらへ

花 昔武徳殿にして五日節会行はるゝ騎射の事ありき又内菖蒲典薬
宮人あやめを献ず又内侍薬玉を王卿以下にたまふ時玉を左右の肩
筆 にかけてたり拝へゆるて二の拝とうて拝よゆるしく左拝舞する之
紅部史地記曰　百索風俗通云　五月五日以采絲繋臂　辟兵及
鬼令人不病瘟一名長命縷一名辟兵繒一名五色縷一名百
索又曰朱索婦人蚕功成蓋始于漢時　提要録北人端五以雑
絲結合歓索纏手臂　初学記又條達織組雑物以相贈及日
月星辰鳥獣之状文繍金縷帖畫貢献于所尊　古詩繞臂双條
達　鴻詩五色双絲献女功多同荊楚遺風　又云繍肅襦功業長續
舜章前云皇帝閣帖曰清暁含披香朱續命長一縷増一歳
万綾献君王　又云肅舘初成長命縷隊嚢仍帯辟兵繒凡去
記云以五色絲緑為百索絲辟兵畏神之
秘 菰葉よわすれ
かほしものをはる
色ゆるしきよしも　色やとく思ふと愉するまじもかなりしさく
かすしくは人のまよてくく　秘 涼の色け終すへ人なるさし
けくとは人恋称よ献と行く家半はくしるすしく之

涼すしの客をかはしは人恋玉もつしれ紐よとんしく人
夜はゆくへしのれきしも　秘 花ちる里人夜は涼人
中将のかみの待つまのまつしりぬ待りくりり
秘 中将は夕暮へ左近へ人よ見きつまりく来りく人きし人
何 左近騎射志よ書之五月三日左近騎射荒よ號五日志よ號
四日右近騎射荒よ號六月右近騎射志よ號
何故五月四日を荒よ注五日を志よ號さく五日れ荒よ號と
日記とふえく　いかよよ號よ荒よ號ましたてに答曰帯ち之
花 よ號は左近れ志よ號之五月あらはかきちり夕暮れ中将左なまつ
夜つくりあのまとしり行きく来しく人もろくりよ號之
男 まつひはるをれ時こ人つひく射つ半左　但来卸一御
まら色しに人　秘 男恋しかまかよしえ人
あやしくたるよは　秘 つくのおもしえすふまて　六条宰院
わしたりすをは人とまとひ終ゑしく人
じましのおもし　何 るる端夜
そ し女まて云る端れおもしけつらちゆひくく五月はあかい

国立公文書館
National Archives of Japan

下としてものかはりはまさし越前ならそしとゐ
こぞさのねかかり　秘　むら鳥の住みよかるさへ
うらさんく　むら鳥にさかり越女房なる宮みかへ
九の住みさまようしき友人　む　友人は好堅　将曹府とらへ
友人は佐男人友と人よわりうるましとは宮前の事く
名いの此さらうしも　秘　五月うしく
嗣　葉も此さくとよし　同　日紅むかへかくい五月つしれよしく
とそこの来了　同　下流スソゴ人
五　末流とは九丁の堆は皆もとそと葉式は綱よ深くる人
おけ　うへは皆う堆のもとそと将しして葉もして　流深くる人
今世しも車の下もとられはなひ
此ゝ婦うき衍のわこあ　菖蒲塞表素裏和椒之　葉集ヨリ
同　菖蒲　表は素裏黒
もとおいのうそとの　同　二藍
四人　新ヨリ　タリト　績し
おからのとそこのしも　新　同　紫苑しも九のとしく友くうらへさえ

一従茜云よのくおかく衣冠しの植よは合さ人とそうすしは白綸之
む　標は西はらと文裏は互之末流もそを葉よ深くらぬそうへし
今そしこの事ゞ葉の名しうかし衣　同　蘭菊末之
む　すそしこは表蘇裏黄之一統表和椒素裏黄之究は茄子
うとも其はなしさう葉の名は開匡麦の葉よらくと見るう裏とねへ
紺しは蘭菊末としは々いろう五私遊之
新　四云茜のきねと云ふおかす一従茜云紫裏を蒸時蒸しらうと
表衣とさら今の世しも婚友との細係かすしは葉し之　うつ葉
のみとは裏りうとさへ　秘　む萩星のまのかうう　新同し
こすそのは
云　流打をうり物ゐうきぬへ　葉集ヨリ
今そしこうきねのうさし　茜　今そしことうよ志うちう
葉集ヨリ
新
うよんこときう
まつりしもわかやまうるはさ田うつてとけさうつきうけりつて
む　つきの日ほのは友人以下ろるよ率うして的を射つあかさけるよ

さ毎のりかとしハ大臣着座さハ人へしくうさ山よりうりて加へ弓ゝねえて
さ御所ハいしくゝえ弓ゝ矢の御さ毎のりうしハいうへし
又手結よハ友人へらうり射つるとと日ハ上﨟ハとけ負らも射ると
さ毎つりうましいうへしいつまてもね音すへし
射礼ともの射つるをいふ也　一ゝ度勤
九本をハ騎射ふるりハ人中ハ的かねハ不射之　古来沙汰ハ
一節ハ大臣着す者ハ之当挿す所ハ的ふる御さしすさしこれ
一節ハ中ハ的かねしあうり負ら御ゆへり花盛て兵係之伺て了る
とけあら次将すり
とねつましゝさ人之人々つる所りそく所え之し矢すけうりてまゆて
もしすゝし所うりて
矢と挿て諸兵へしうろえ
是ハ競馬のすとうへる諸の手結ハ騎射ともしるよ家々て的と
射る事ゆうりし競馬のまハすることも月めるれ節会武徳殿
ましう所りうし事ハ騎射のすもそし競馬もそこ古ら之人武徳殿
ゆく十列し競馬そりつ後る所のよりめ日ハ五位殿上人も祭れ記るよ

昔ハ六日ハ騎射にかはる事ありて競馬の事あり又長和二年五月十六日左
大臣の上東門院の土御門第に行幸ありて競馬ありける人々に仰て騎射の
事しるし近衛府の将監府生馬場殿に出て北陣に近衛府生等未欲之例見
紫宸殿並御廂出羽競馬し騎射并近衛とあり又万寿元年九月
十九日関白の賀陽院にて行幸ありて騎射をいふ手結とも騎
射もしよしとて帝の小御所にいかるとしもうり競馬ともそ又騎射
のもすうり　西宮抄六日競馬左右十列諸衛府各欲出行 左右共去年
騎射無 騎衛并南西に諸衛府着奥形し尾鞘ある人ハ諸衛射及
雑芸物装束皆有例色目更不儀記又凡左右近衛府騎々
華ノ装束袍中子冠黄袍鞋紫衣持毬杖　延喜近衛府式云騎
射人ハ一人別皂縵緋布衫金書緒中形金書鼻形近衛府十
人細布衫銀書布鼻形　兵衛式云右五月五日騎射官人二人
皂縵深緑貲布衫金書細布中形金書鼻形　兵衛式
帯横刀弓箭行騰麻鞋
凡五月六日騎射官人近衛府生並着深緑布衫錦甲形白布
今案騎射と競馬とよ昔の装束不同競馬あり出つもと見え

と陵王の装束のよし謡射ハきらし褐衣をきてとくさよ綾装束
うけ舞ふし給ひしもの名人なりけしきさし玉はんと
てとハ競馬のさしきくの舞一人
てまひけし　秘　わかさひきかへ
られ舞のまゝひもと舞くしし　地　ひる陽を仰ぎ申してもとし
さむハ筑とのおもしましき雨の時の舞の対をかへの立乃
ある人としもハ名高き人と
たてしらく殿く乙じおし　詞　たきしらくありて
詞　打毬に納蘇利　高麗曲破急武落蹲とも　黄鐘調とも號吟毬舞あり　第人
第　紅乃平調太食調打毬楽
地　六日武徳殿の騎射して打毬のまゝ九月八し装束さし
るよ舞ひて毬子をもしらし入り打毬とも奏ひて
舞と打毬舞とんいろ納蘇利と六日の競馬の日雅楽寮供奉と奏
第　打毬舞ハ必その時の勝方より奏しなく　太頸樂と此舞の曲　宗従ら
つらまけのらんしや　詞　法の舞楽の後乱声　此舞の事
競馬相撲武闘鶏なしとも　地　延喜十年

勝方乱声さし見へしらし競馬打毬の舞に蘇合花の指貌をと奏
さしさし又陵王納蘇利などのまゝ入打毬舞もかたさ有ら勤
地　うらまけの乱声ハ必競馬よあるまゝ上さらに賀殿競る
しも毎年此乱声ハ奏し又競馬の時奏す蘇合花　尼　指
騎射此舞を行しけ楽と遣ていまいるまゝ装束のなハ　保延
四年四月宇治花扇記で見へしらし蘇合花ハさ獅子のし
乙子六人面形如太人指龍ハ馬形二走裏尾舞人之衣し
いねすましとしほりを以く走るに
秘　らんきし人勝方ハ乱声とし必大太鼓打しらし舞人今も賀
殿なと競馬ありしも此面龍そ見ゆらん
よありさてのらく　詞　色を来たる人へ
おもしろきさにおかりしのことちりぬ　字　花葉盛のまゝに源の蓑ほかへ
さりし家の　秘　源の朝へ
人ありハ　秘　人ありハとく見てりししくし
ましけへとなり給ひあはれし　秘　乱のまさ人ハあをさして見れし
の人ハなししらんすさやしある人も何とし猶かしこの舟と見ん

斎宮のをさなき人ハさすかしくさなり
安　うしといひてさわりしすさましき花散里にハ見えかくれこそ絹をおもひとゝむ
　　私抄　彼ノ義ニ付テハ此段ニ付テハ後ニ人のくらき人に見れと私見ハ能ク人も宮に分ん
弄　御後見のあさき人にあれとも私見ハ能ク人も宮に分ん
ねかしくよまて　　　　　　紫上之
抄　源よりハ背かくましきせしと源ハよくく見えしらすかくて人
しけくれたれハ　　此君ハ人々の心のうちにもしかしてなにゝかく
源しれかましくおもしろかりし源氏の御さまにはすそうる所ハめとと
此文ハおもしろくすかしく人
遊よしのうらみなかりしに
まし紹ハさりしくとん
　私花散里ハおのゝの女御の御もとにめしよりもくらよ源し
めかへし　ゆかりの源しかへそめ紹ひける家へし
おもの見えこよしゆかしく紹ひと　此方々の背く花散里此ひとく
　つり御文の事をいひわかし　すかへ
かほえてき斎しさ　　主氣文としきミゲキこ

抄　紹ミめくらしん　　　果ゆかし
かしかたいつ紹ひけりまなりし　抄　花散里ハよしく見ん知紹ふる
しし花ひらく源の心をうしもしかしひ紹ハさる人
るゆゑとハすしとも申しとも　との御みなよみてこゝおち
おほとゆしまとして此方て文御文なしの御ハよしゆし
けしとも花散里の上の葉よりをおもしろん
　　私紹弄花ノ事御へしと
人ゆゑへとをうんてけ　　　　　　　　河　雛之
抄　うらしの下にをとゆくへし
右大将すしゆかる　　抄　蝉丸之と室の人の人のすゆるひゐお
　ありても御かたのすとともらいしもの身ニ成人
らうれさすかくらん之　　抄　源の舞　まよくらんまて
弘　鉄丸大将と御かたの果よりもせましハ高くと云ありとも人之
としにわりしたとも　源の御ゆよりくしかうすよ思ひつへし
いふハたまし大かたのれいしくひ　抄　花散里と源のわすひん
　いとせのうらしひハ今ハなかくうらし

河名あらん
かまへてたしかにくもし
（女）あらくへとらくれこノ字いつきも清んさん
なしてうくるすれとましとそし （私）ハノ字両節より一節は
詞字之一節には離く　此消にあるてにすこしひらかな
そし源の字かへ加へしノ字詞字くしく此て清えいて
なくやうしてそれとききらし　清むへし
（半）根すへし清しねんそしてしひそらるとそえりく我うへし
折ふしにつけらるれおそらくひとくとへ清くくよのに
花散里はこくらしんしかるやしの了ゆくしりしあるすり
なまめかしうしつつ
ましはすさ清らふに友のはこさのほかうきしけすらうしらえ　（枕）しまるれ清るしくはまるさ
（花散里）○その詞もとさかぬ暮ましみしよしくらゆけのあやかりやゝしらん
（河）抄木を詞そやよられよ暮ようよ暮まいれ大斗をあらへとうらん
（花）（抄）鳥とともくうらん古らけ行くゆ暮河やし詞のとをあさうかう
と書て菖蒲は詞の合とね暮するまいるとさかねしけり　ともさえ
ねは不審之ゆききらのあやめもすくよるの道に菖蒲とうへらるし

女五こ人くり花散里は我かの事にあるよとくへて清るへり
（源）のなれととききむしきぬ身すまるとくれふの頼るにはいは所れ定所
菖蒲とれる合とうらん花散里はしすきくによるよふされし上ての
後ひよ思しらるとくてきすこの所の秘かも定のか漢字あり折こあひらるし
すくさしらうん
（上原）清るようを御すしふかきする詞はいつつあやらんよ川まうかへさ
（河）まう詞しゆふよあいつつ河やかかいおひおくらしやまうつうするしん
いつ詞はこうこさ事之万葉に見ゆ我の花の詞とせうり伸くもし
かまる道とらる之詞うしもえんらるも
（秘）まう詞はこうこくとへ五まる道とうらん之詞くしへの日すまるは出まうかて
詞をうきうのかかふるもの一説こうしは菖蒲に似ておとうしらる菖あん
源氏のうう身とまう詞によりし女房と菖蒲によめしへて似るとうり
うれしもし川まうるましとこし　思ひ清へし
（寄）蛙寄何よおしとうはは抱詞之記とするしかうるするれは清りまう河
やわし記と入りしふうへ川ふううへさしいも花散里と源氏の所やとのすとらん花
（秘）記とすしかうる寄まいは抱詞よあけらへまう寄はまうこうもすり　まえ

こゝもとおもハしくよ覧て新をもすしかつとハせてかうくへらかれ
花散里と源氏の御中の事をよりつまにかへ　花流くまさる中将
あいこらすこ御しくもすらや　実風流なりぬへし　草子紙也
義の御方ハ絵もとさめぬし讀かひて源氏のとさめ給ハぬす
をはの見へし源氏の入情なるには新をなすかうしこて女房ハ何を
かとりくまし　くらつましうしの給へ何もあいらすこ御心あ
かうの家にこしめさるへ　日上ノ絹のこ頃へ

秘　花散里ハ家無をひひらし源も文始のなき時ましけるやうへ
能夕の色さしろう根るれし　源の絹之絹々うらくひ給ハぬと
すきしうらしきら人々心ハ済たる心をするとも
のしやうよなしとも人々頃
庶をハゆつりもゆひて　秘　花ちる里　案　庶をハ源氏よ讓り給ふへ
秘　花代の庶をハ源氏よゆつりて我身ハあすく色さりしおくれ給ふこ
出ひしなきしし　花散里の心よ文始の紀ひハらう離をし給へ
あるうらも　源氏の志かりしも実しぬへ
すう敵きいのよしろうしも　秘　さ月敵へ

御さく立とのゝよう　箋　こゝに世よさゝやる事を記しさうり
家もくしいとし心如ナし　給御海ノ給きし讀てこ先給ハ御流海へ
けうしの御かたこハ　御心とうり姫君へ給なくなりしすめへ
西の對らしハ　わすらへ給ともこのましくかうかめへし
給さたうしぬらうへ　秘　弘徽殿の御かたよへ給なく事すへ
給さたうしれらうへあるこ御方へ
箋　上ノ絹よ人くしも皇へしたくもさるりしつましくすし出母　条出之とし著なんれあん
君の御かたらへりう宰相もうつの女こ家遠よ御しらうさもしれ
遠よハ何しれ人くしのなもしく給始の論まさるひへいあるこもすらへ
さ海くよかつうするへへの　御しかりよいつへくのこ頃へ
もくよしの姫君の　あさと揚くてりのすへ
給君れ御流よ中納言の姫こへなる中よ一ハ文へりしすもあるへし
もくれつるにるへ給へしあんしいしかうしきるをすし母揚か
後のしとあよ出ひましすへる事御見としうし給なる六角書堂の
かう書敵い姫君よ出ひくかうハしをてすといひなりしある時こ給師
とつこひて姫君れとし對らう出つ給ひしせさとく中納言よ

是らのわざましく思ひ定めつる人の年ごろすみなれし浦を後にし出る入道の
子としく宰相の君の法ありてある人に合せ給ひしにあらねども母君の心の
うしろみし七十にもなりすぎし翁のかたくなにおもふさまならぬを思ひ給へ
とかくいひしらへのうちにこそ心ひとつに宿りて見えし姫君
[illegible]父君のしかのみにもなしの明石のあたりの雨のもりしは明石の
ほかにもなりし明石の姫君と定めしさま年頃明石のとなりし
今上明石の姫君の御母のさたしかはこれなかりしをし上手男の
とのおほしはれしのまりに思ふよりすらへのこころなかりしさえ
大君とて出たるまゝにうちかへられしかはしたる明石の君
継母のまゝ女に而しもの人とも姫に合せたりし父に従ひし
て生計にしそのしく何らさむるとまし姫に心へりて父へり
ことなく娘女に従ひ合せしまして嫁姫君に優すらぬ人のほかはしき
しわかりまへなりしは 抄 其内をつかまつりし給へりしと
弄 本の明治を宮のうちの白浦て紀姫君のさまとみへらり今の世にいふかりしく
うちへのうし　民部卿の故宮も計も孫女家なく
弄 彼地よりよりまさりの母のもとにして父に従ひしまさりけり大事に

ゆくへなきことにて
弁 には如何にやかのさるへしなき 抄
[illegible]給ひ人へあまいひ出しなりとしもさまれは源の宮にて
何しても何ししやしはされさとしもさるへしとして
さしと何しもや 抄 かくしの物語を知をらすさまもとの宮にて
私 弁君は人とかくとひ出してなるへしさましに有しき
しき玉かつら君へ源のいひけすに詞へ　おもはれ給へなく
かくはいつかしかれしか人や　弄 まうけしけり乃給へ
孝抱云為後者 玉
玉鬘君は源氏の須磨明石をもしのこと宮にてゆひ給ひしを思ひ
思ふ人とて家にわすらひにはしも 源氏の中より宮に詞へ今
源氏一部の始は限によつかうましくもそなたとおもふへし
抄 見えしかはいまうつし 弁 詞へ
さるものしは何しも 抄 源すくへ僧を出ぬれさる人へうちとし
わかゆきすしいひつけけとし排泄しもいふなる人
こらすくも中すかとして 抄 こらか実年すら 地体
無男不女おしまてまきらし源の情傳しし宮にて
弄 嘆しとれまうすし
紛ゆきり
かりしかは限
ゆかりとも思ひ
の作りゆかり
れまうすへし

あつしをきこゆれは　此段ゆるしてこそ　神代より
ありしよりあることのするしにて日本紀なとハ唯かたそはそかし
日本紀をしハそもそもこそハそらし
河 日本紀卅巻　舎人親王撰　私二説アリイヱヒト、ヨムトニ比支
細二十巻カレキん
孟 日本紀三十巻始神代至持統天皇御宇一品舎人親王安麿
等撰之　今案神代より世にあるをしるしおけるハ日本紀なるへし
是まてとハ明らかにして物語の草子ハしるしてハ作者の御詞しのひ給ふ
書出の書にハ上にも有る日本紀なとハさりとかれハ大概とする
ありしのされ候よ仮名草子なとにくはしくかたしの道々しく
?されともこれらにこそ物語ハ紫式部ハ源氏物語もおなしてこそ
おしくひかへてもありしをなを思ひよるひかする也
此段人々あひしらへれまします
孟 是まてハ源氏君の世乃の作を宮
細 源乃詞ハ下にハ紫式部ことをいふもと作者の大意を河また云々
荘子寓言しそらんことくなと寓言借他人之を云なりとかしり　口伝
弄 文字しさかへく寓言ふ
見えしかなかし
後の世まての人ハつつくも人ハ云つこも後の人事河にさす也事云後
生れいのちしめたるもの也
細 されハ人とかりそめにいふへしと書
まさに此よりハけるすいかていは
くしよらうつきてかゐるへされし世ゆるしすさまするまハえもいひしもるん
人しあさうらんとしハ　細 紫式部作ちを見よあかし寓し給ふ
かくのみしるしらへつらきれハましろ　孟 人の帝めてへつらり
唐時代書籍云文あり人の作ゐまる人
弄 もくもいさんへまし詞よそへとまる　是業 有給之 諷日
細 ふんハ文之一字さん伝へつれけりまし之夢と能す事ふれと
日本紀唐土のも字ハ文章に出すと下の作つれいてかりあ
世あるハ日也人此肉ハ中くとまて侍
第六 花鳥にハ人の帝めさんつつりやハかもしろとして　河
おもし風さしる国かんしとすまはこはちぬ　和字
孟 和漢と物つすあれし作ちの世ハ後代がんさまかしよ志家し
あしすかすれハ出すへ風月との出かん書とも古人今の相
遠木まとも偏にしそうしくハいふつしけりく

久於たとよらハまつりすと　実録并語乃作をさ人を中よ
て俳諧よまうりうへられ一向よすゝさしいめまうさし支え
給りのころとゑとけてい宗あの人
私業ともよ人のこゝろのさんつくりやりうハまうる所し
大和乃のすといハ日本紀と綸物語のすといふすゝや日本紀も
神代のりとおもりして漢字を用ひられ人の見わかるの
さし云前しい家よわさるへし此綸物語ハ仮名なへし
さし置て世のすを語つり為をハ中し大和の書なりすへし
いつりかる趣く漢字仮名と前今ものゝすし乃多かりく
ゑのつけれすしもにし事ハ申し和国をもりするへ綸物語
とそゝいをて用ますかしたとけく謀の宗とを如へし
佛説ハらうつりしさ包めし続をさうすへ本佛法へ
法ハ法門氏頭よ法ーして絵法しうよ二つ所謂別傍系別同さ
長時念平等これへ
志りし天台宗円第よもうハ法花を志ら実へよ宗ろにそ花ホ

前の法教とハ皆方便といつゝり　方等經ハ五時教の中ー第二
時よわゝる大乗教乃初門へ浄名思益の経へ小乗を彈訶
呵して大乗を褒美ともうりて方等部とハ弾呵褒美の教
としを二乗よ等しく法すふ教へ凡佛の方便へいつきも三乗
権をうしても説まつ教よすきさすとしめもとさん宗すと
とすし宗かふ教よいつるすうしこうよハ入りろいつまを実
しまへ宗志うし本法ハ元主方権とそうの宗立るの二派とし
すなく法よ一実なふ派をしめし一旨よ称る人二乗唯一の外無
別法乃理へ煩悩と菩提しハ俳さへハ水し氷よのして水
と氷とハ只一性へまゝへハ菩提のみ氷しするふれハ煩悩の氷
わとすうとし全く別のゆよわらして若迷界二那正一如の理
すれも志りしくらさあるさはうれろう　急まりうらいつかさ
何すも此すしかれとハうる家給の物うまり假名草のをすと
も見かよりし益御利しことく別方便の法教とらへよりうろ不
すうへしと佛乃此法よ川まてるしつりとの人すふへ
我此股やともしすのしうつされりし教りわりとうくもうる法称ホ

只ひかり山峰に衆生の機根を照しめし給ふ時をつまひらかにして

第一
先華厳を説給ふ事あり
方便の教をまじへず法界を示し給ふ所も悟りの道をときたまひし是
頓大乗の法なり偏教に交はらず大乗に入初めとしてあまねく
凡夫も聖人も仏も一如にして凡聖一如善悪不二なるを示し給ふを大旨
のさとりなれは是を直に説給ふ時故に頓教といひ又
此経をきく人は衆生の本性を知り仏と衆生をともに説
法と仏と三つ家唯一色に法界乃仏を法とうけいれ給ふ故に
是を華厳経の所説と

花厳第三七日之

さる人にはこゝろへかたし

第二
衆和大乗の法を説給ふ事は前の法をきかれしときに
衆生は耳に聞えず此法の理を説給ふ所へ機教相応ならされは三七日思惟
ましまして後に大乗を座りてまして十二年小乗を説給ふ
さて阿含経一向の小乗の御法を衆生に聞かしめ教を
ましまし給ふ御ことはりをしめし給ふ

衆生は機にかなはず小乗の法をきかせしに悟る人もありて是を
此方便をまうけ給ふ
是によりて方等々家和大乗を説給ふ時に法の利あれ
とも衆生の機にかなはされは先大乗を座りけし阿含を
説給ふて其中に阿含は一向小乗也
此ことはりの心をしるしこゝにしるしつゝを推はかり給ふ
方等経の中にしておもひなし

第三
方等の第六年に説給ふ

四
法花之得謂讃美説謂統之心也　阿含経之四諦縁生之法
門は全く如来の本意なしと一化の機根にあはして
衆生に悟りして是皆空の理を書して其色あまねは
よりわかりましてその理善偏表之理不尽もしる
所に依て衆生に守しまして方等経の中に回教を
すゝめて是をよく説ましまし是は浄名経方ましまし此時
若乃さまにもつはら今のさとりもほのかれとのさとりを
始と一化の衆生共に悦しめ給ふ也　須菩提

としりてゆけ
といひといひよ
りうらく
菩提と煩悩
よめてとくらう
ぞん

一念元有を猪乱して迦葉法ハ三千年にあらハし般若悩悩
としけふに一称し見て見よりうし法く他小幕大積ハ直に
申し迦式ハ別よりもし我ハ世よ叶ひ太二三読よをう傳られハ
秘
四教並對の教といひ又浮阿乃教といへ
いまく衆生の根縁熟とやうに教の大小乗をすへて説かん
此時首ひとらうけらとらの法をとくとも退うらんわうんにいかに挑
根野二乗とハすつとも二乗の見仰すとんへしるうしとの法
をすて迦葉法く三千ゆしうひ若若惆把しし玉ひし一
称とすくといへりしを後年ゆ人空の理をすめく卵さうしと
說る人方等経の中にいろしくいはすへ　仁王ノ説　法花に卅年
界
花厳三七日　阿含十二年　方等無説明　般若廿四年或ハ卅年大般若説　法花八年　涅槃一日一夜
いひまてゆけハいひといひしいよわうく
五時説法とらく法花一実道よ帰さる人
仁本閑三類一ノ節へ　般若悩法之心元　彼阿含にもし体
空彼ノ色を理めしつく方等ゆうして有空猶とし、と今年か人皆
空と説ク彼所ノ様を捨つらくへて有空一念のさとりを

黄山ノ
ゆうしも
よろう
多よの了
菩提と煩悩
よめへとうう
名うら斗
もそハ寿細
小難済へ此
待云余乃利
上下のゆうう
いはようう
と云あ於之
煩悩のようう
道路煩悩之
菩提よりう
これハ煩悩
らくくよ
菩提へ

わう人すみ見をいひもてゆけハ一つもよのしといつも元之般若ゆよ
うくしけ万法一如の心元とく
秘
唐し法し一色一香ちしめうし純一実相にして別に法なきへ
あらいとあん人すみとの角しうと
行
涅槃　案之此物偈一歌之大意作者己説之頭見よ見へしうう　煩悩即菩提生死即
方便とハ法花以前ノ説教也方等経とハ方等部の法大乗をさして
尓前之法教法匾至法花娑持能一縁悟一実回獣之首又煩
悩即菩提ちみさしれハ菩提とんまん煩悩と如へ此お心へ
筆
花厳ように涅よ出文とと
法花経の如法わしつもこく皆唐し法し一色一香ちしまう
法一実相にして更よ其の法すし　天涯日のかう月そうう蓮
葉ハ末法く松葉ハ松そらくしし見術のすとうとしり松末そ
や只天りのいてしるのつうし此時の泪角うハうう人
か縁とうらとそしらうりしもすく説於よもくいへしと云ぬ上
菩美と云を取へし　四十四年ハ菩薩すうしとんしらうろ

菩提ハ煩悩としてこゝろよりおこるハ父母の書淫世界乃如道に
て常にこゝろ毒於の角を捨て鋒とくらうとしわらとなく
こゝろまよひ如道之彼ゑん末開含こゝろ時ハ去りし煩悩菩提と示
よたちく生死涅槃の二路に迷ふて我ハ方便立実を知らし
如来の後をうしなふ今は元含の前あへ於如来の如
ゆへし全く如来の方便とたゞち之二毒之身五自性ありハ一三悪道
誑佛 毘盧身土煩悩菩提本不生なれハ生死涅槃又空花
之開落之見たるはる花の菩提一様之始終へつゝしての
実常とかとらハ五十余年の方便と見よわゆる北に於ると
入りてまことの実いつまこの虚偽の方便と廃し始くなる実にまし
まして一代の仏法をなすこゝろハ六根境の空に示法空として
等
仁王経上二諦不二云菩提未成佛時以菩提爲煩悩菩提薩埵
佛時以煩悩爲菩提何以故於第一義而不二故
人之菩提ハ菩提とし煩悩と之悪皆天台乃文といふり 業
我経ハ天台宗の許可ありてと清て宗旨を捨めよう
くいへハとくく何ゝよし宣ありしうらん

父
菩提不二ノ理ありハ之をしれ作如法にてよ皆妄実れは理ゆ
しつまはしゆ法又ふ體以よ従ときよくのかしいなれとし入
さそゝうし執かうしゝの中よ 秘
まよろ座ゝよ 生死ハしりしハ男女の愛染之人たゝ人乃ゑ
よ凡庸ノ二字を用ゆるあ沙り又とよゝ文字にいらへて阿凡
ましいろうするゝ夏よハ只自ら稼して凡とゆうとのまゝあしゆうに
去れよのしゆこゝう 秘 愚癡するゝ
とのしあ愚ゝ 弁 阿難愚とよをあし
佛知見座ゝして 源のまゆつしと作しくいふ
毎ゆしいすゝ如をこゝりぬしゝて世よ法へさゝん
王ゆうしのつまますき如如如ゆうら作ゝて世よ法さゝんとして
かかとゝいまゝく 王ゆう の弁へ
作らとよゆうくめつしつゝあゝこしハ 秘 王ゆうつれ四
作ゆゝ如うよりゆしうしれよ世よりうつれハわゝしく
めつゝうゝやゝぬかしれてのゆゝりでゝそまさなゝき如らことゝれ
秘
源乃何家をハ世ゆう 為めしうすさうすしのすゆしゝいろうすれと

又申つれとも仏まつらせ給ふ人の世にも済ありけれとも
我玉ふしは三宝をもいかにしてよみかへしかしくも又いつれとも
ちかき人にもありしに宝をたへ
よりも昼夜に侍りしもあれは　はつれは同じ
なかなかしかはおろかなる事也
〇孫　よいかなりしかしの経をよみたまひしかやにてさしけり子をうらひてさ
秘　孫の事を玉ひしを寛子かしく宮へ参りしかは見え
ふかくしけるは仏の思ひしと　以不孝　シヤニミクメヤワス　日本紀
昌　四十華嚴經十二云地神常言我負大地一切所有及須弥山
不以為重亦無厭心於二種人常厭倦不欲任持何等為二一
者心懐叛逆謀害人等二念棄恩親不孝父母三撥無因果毀
謗三宝破犯僧如是三人我極患重乃至一念不欲任持　心地観
経第二云世間之恩者有其四種一父母恩二衆生恩三国王恩
四三宝恩如是四恩一切衆生平等荷負善男子父母
恩者父有慈恩母有悲恩云々世間所高莫過山岳悲母之
恩逾於須弥世間之重大地為先悲母發惡言子即隨或在地

獄餓鬼畜生父母恩重経梵網経本自余経不違記
秘　花をよめり
かくして　玉ひてしかくしし遥なりしてよみ候へ
〇とおりし　あるひとかしか御あつねもとひにすりしまりこの世ようう家あるや乃めし
秘　孫のよしもするかのことは古地獄するとましくにすらしく
むかしのうかれは　前の仏を祕し　孫のよめの記をぬへ
くしていかなる所をうり海すん　玉ひ勢かれ玉ひ朱と地獄作者云り
第よ事地へ行し玉ひ来はうちつらてそくしすり
もしかくれ乃人々と娘君れ玉ひあつくよしかれとく
此は娘君れ玉ひあつくへとくよりけれはうとつまやすり
人の海乃く地ようり　此古地獄　フルキ地獄ありの経か地獄も抱第子あり
此何ぞ又古万葉集みすし此集とも云り　二海の地獄く海乃
地獄あしく云ふかよしとて見かやすりし　古やせ
玉　此地獄の経とて　古地獄と云也へ
とかき又人の海の地獄として云ふかよしとそれもこ海をくさもとあ
ある所と言ふにようくしへ　今案ニ海外地獄ハ抱第子も地獄の

なりし出来り物語といふへし

いとよく書つゝけられたるもんを　源氏はつくり出し紫上と

とりわきもにいはらんとする人

らいさし女君たちのすかたなとを見てもてはやしける

玉　この物の物語の中におのつからすへし

むかしのうた語

玉　しかるうへとしるし是といふしのうち

　　拙　紫上の前の事を見しおもふこと

はるかにしはしらへにいつる

　　玉　是も物語の中におほくし

源氏君は家中よりのもてあそひに書へり

まつ須磨におはしますと

紫上とはいはゆるよき筆にしなりしに

　　玉　すまかへしなとおもふ

なにもていかるゝねことはこのたおのゝかすへてありつゝし

おかうしね世とはすまやとも物つくりまかるたて物うしかし

こゝろいつてのことけさいかへし物かたりさるゝしをもしあとり

玉　まことにしえうり此下草子にも

草子とものをさまし　又源氏の兄おのかそれとしすへき

　　源氏の好色のすさみ

弁　このことおのかたりたる此人おのかたりたる　花宴又へ草かり

紀のとの草子はしめ合点にゝ写し

玉　この物語の物語よりもとひいれさすへてもおのかたりをのへし

拙　草子はこれは紫上の初へ好色のおのかたりにゝはいし草子ともかわたる

や又源の兄おのかたりの事へ好色のみなしおのかたりのそへ

紀氏源氏の好色のうへよそへていふかゝりしねすかしもしと

おつかすいつもへさしいるてはくいしとなれ草子にも物語ていきりかたす

姫君はしめきへし　拙　源の旧へ　おりしれは校異へ

こ物うのつきるあかりのしむとあ　空蝉の乃わへ

玉　須磨明石の物語にいつそすかとしいつて須磨の下とはいつて須磨の物

とへかけにしるすかまつるもの

多くいの侍るとかうか物をさへ侍りて作りる

玉　上は紀の御姫君うしいへくはりしよきかしたしかへてしれは

おのこしいつうしの帰君うたれ世よりさかせうとへかうてとそれて便を

その所をそへおるかはおほすうかきしいつまてしるへて

拙　玉のうつし此すきすまる源とゝ物女なりへしかへのつかれにすへき所つけかもと

第七十八 菅根信九の中将ハ日
ゝへ給わさけるゝ人まゐらしゝはゝ
枇杷のおとゝのかみを宮にまへされハ見みゝしもかくにいゝきゝとん
かくの藤原氏為君乃むしむしと女　菅原氏なり一世の源氏人の女也　実名之　花之詳之
おほきこの人さいゆひしもすいゝれ給ひ内へまいらしゝ入すり
これも何ゝまうすりとのまゝ人
六十六 かくいりの地所に藤原君としし一世源ゝし太大臣殿ゝまゝりしと云
人ゝ是少将と云人給へまへりけるノ人ハ摂政大臣の猶子人ハ時の比門
此殿妹后腹の女一のみこへを后腹の九まおほうかくおほその文と
中かんおもとくれるまへ行われハ妻文と姫もうし時のいゝしとく
中大将へゝく一位とつくいよゝし人とにハ位つゝくして妻のめへ参り給
ぬまへハ源かゆしいか人ハ他家しして山かゝうしゝ行もらう
かし此殿すへしハ此文を得もちゝしとさへゝゝし給へぬ太
宰帥滋野幹まいゝるゝしゝ何くしゝおそへきさ申しる
人いゝふしかりとすしてりまへ文とつりして内裏へ参りて中ゝれハ
佛ゝとのふかゝゝすさまれと云ゝゝまゝれハ男女の子ましゝゝ
流しつかゝぬ文ゝゝゝ大臣とゝ云人ハ家よ火かゝつけゝ焼かゝ
かりして山よこりゝぬけ卿源宰相まゐしもとしまゐさ大殿ゝまゐすさ志
中納言為ゝ文上野守御むいの女乞何ゝ此女御の后腹岩清水
せさ清さ為大臣すなゝりの父兼之 源かゆけ人いゝしとらんゝしかとし此君達文つゝい
猶女房すし御ゝゝいゝといひまゝれかし皆実にれまいれ庭とに
かり見とおりゝらんもゝくしさ人へゝしおやまゝらすしとゞりと
秘 花すゝきみゝゝり枝女の人へゝりとすいゝうし何ゝりし参りし人へ
これもおほゝくすしのまゝすり
とゝゝゝよいひ也さゝとゝかさと女しゝさかゝるし
六十七 いつまゝしもすゝけすくりゝしすしてあきもなすきこ文ゝことらと給ハ
とと文源宰相これもゝゝ志わかく宮しゝふゝまさゝゝよとら給とせし
菅おゝつかるよふゝかつ為をハ菅すゝ泉のあかそむ志為ゝん
志ねしいゝくたりしゝ何りとん地とのゝ世かよ為そ君のまゐよゝくよ
ゝあのかゝ宮見部よのゝもゝ文ゆうさまゝ或岩清水往寺とゝゝし何し君と
文ゝしゝ参しゝいゝ内也すへしすゝこの志ゝゝ参ゝしかゝゝる人のとゝす
為しとぬゆゝりロハかんとつゝまへハわさましゝしいゝゝし宮ゝへしおゝ

是非をわきまへしりて世のしるべになすべしといふ心なるべし

かくの人を　河 賢人也

弄 是より又源氏の詞へうつれり人は現世の人なるをいふしかし人も

ありそれもあらしといへり

抄 今現在の人もうけたまはりにも上下をわかてるゝ人をいへり

弄 現在の人をいふ也

それよりにの身の程をよくしらでよしなかるべきの心

弄 身の程をしらでおしはかりてよしなかるべし中庸にも身の程をしると

抄 此やうなる字をしも読みて口へうつさるゝよしを見ゆ中庸をも身しらぬもかりし

かならずしもしらるべし　弄 素其位而行中庸を見よしかるべし

よしなかるべしなるなり　抄 不慎身しらひかなしはるべく大

なりなるはかくし何事にもそれならば曲るなるべし

私かくさりしにつき人のよしあしをしるともなさていふるゝ心を

そのかしと読むときをさんかうし給ふをよくしるしにて経にもよ

かゝる人のよしなしとする事への身ほどをわきまへよなるべしと心得へ

こめしらぬと　花 おさなかるまじきかむ　第二　此事也

臣めしらぬは大臣しかるらん

おやの志すべく

なのさとりて　河 立身行道揚名於後世以顕父母孝之終也孝経

抄 かくてよしあしは人あされらなる家の志なる

とえ人をよく身のさよしを学とやなしき程なる心

よ業にてなりぬるにかなもえさなるなり

弄 想法の作りも身をよく想志のねん心本なりとて此しと

するこしに此志しくしろかへりしか心

抄 花鳥の絵物こゝろありての作らる事をいふにや是心世上にありとくらへ

まふしみて　人のえらびて給ふを事とすべしけるよしらむ

なしすべしねすしきるらし

よくよりねんべし　河 崔子玉座右銘云無使名過實

抄 此座右銘崔子玉持する語の世にひとつ判あらん書かならずとすもあるへ

私意とするかな聲とありて見なしてあるへし

これ非業のてんつのもあらしいはれ業心えへ

世俗よりてんさいかしらぬ人のかへそうしらるまじきなり心へ

まゝ母のもとへわたる　河 後涼ハうきなき也　此本巻二にあり

秘 紫上ハ明石姫君のまゝ母としておはします　まことハ住吉物語を御ます
母のあしきさまをかきたる昔物語おほけれハ　心見えにこゝろつきなしと思して
姫君に見せたてまつらせ給ふまし
心のあしきをいふ也　一説
まことのまゝ子としなるはうしろめたき事なれは　いとおしく思し
めしてかくのことく絵物語をかきとゝのへ給ふ心なり
とりえらひたるはすてかたき　花散里の御説なり
えらひつくしてえらひぬくものなり

中将君を　秘 夕霧也
夕霧の中将は紫上のあたりにハうとくし給へ
私継母のすちの趣とかよふかなり
こなたには　秘 紫の御方也
姫君の御かたには　明石姫君の御方へハ夕霧をもうとくしかねぬ
いまの世のならひには　源の君をまねひて今にいたりていたはりひ
ましいてさらにしたしくし給ふをとまりにまいりてもつかへ

これハ人ありし君こそその内　姫君の御かたにハおはしまして
さいはひ人の宮の女房ともかたへハ　秘 紫上の御方へ
異 六条院の女房のきはつかひすゑ
又 桃園家にハ兵部卿宮の女房さまつかひけるなり
おほせともおはしまさね　源の内侍のとくすくさまし
大かたのつかひのゝ　秘 夕霧をもおもはるゝ
おほしいたす事　夕霧のおほしさためつれ
むかしよりハうし人の宮とも源の宮をとして
まさいましけり　見えたり明石君のまさにいくたりけるかたれ
家の風とはいふなり
かの人のありしところは
玉 夕霧を女房と思ひ見なれはあそひしまつるまし　河 雲居雁のこと
雲居雁のことを思ひあるのつまと思ひまかりし給ひける
ひいなのとのゝあそひつゝ　姫君のひいなのあそひとや夕霧のおほし給へ
うちしかられ　雲居雁のことを思ひいてゝ
のとをさをかへされけるとよハ　見えたり夕霧の御心を思ふ辞

をさへ人すゐさうしすいひおきしはわれとのつしあねぬ又異本人々
さうしうりすしうの見さし人　かく四角のつき人々すもなを
さうしとうくるうしく雲ゐ居よん乃すつ成ん
柏のみとうの秘説
玄 雲ゐの居のめのとの六位とくをとしいひしとをうすとさま　河 六位宿世とくせしといひられしすん
しくやとのすへそ柏雲ゐつよ父説しとあすつす人
侍人とうすさ本しよハ　弄 しけつよゐてそ雲ゐ居つとを選ん
あすらにすしうつひ　夕霧のさうう雲井居をあすう
ようしつひ志るひすふすしハおしれ中うしすん
久きしとゆするけすくはしゐ者目わしすとつしと
思ふし人々よりしとて之ゐもとひいそられぬ心ん
秘 今りしたるくのすう四大臣もゆうしすかつさを夕
霧の父よハ常色しるそ宮ふつさしし名お在し
父ゐふ家しかつて　秘 倒人ゐ色うるへん　弄 白
さうしをハつうよハ　秘 雲ゐ居斗よハ色を深くうくうつ之
せしその思ふら　秘 柏木すしへ夕霧の性を深くしくさまて

そもいの姫君を　玉かつらしん
右の中将　秘 柏木へ
いひし承たらう　秘 居うこすうしん
この君とも　夕霧を玉かつら一の息うらに柏木の耗もん
人のうへさし　秘 夕霧阿く雲井居のすのよあう
菩しのうれしくぬら乃
秘 也 夕霧柏木乃此中しうしの父君達の此すうしひの猶すうとん
致仕大臣と源氏との此わうひ又父夕霧と柏木とのましうひ
の筋合しうらく
うらの柏とくハ　致仕大臣へ
推のゐい出うたろし人々　此君かうと或ハ母うしとの
あるトくへまの思ひ有すしに志さうひその乃うくよ色のすし
つしすしうめしたのみしとへ
女ハ何事々も　京園には男子七人女子四人或く
女御もうくおうりしてす　河 后のゆすへ
秘 立后のすへ

姫君のもとへしのびてかよひける　よみ人

松　夕暮と何かまちけむ玉かつら　たえすそありける

彼方とかくしていひ　　玉かつらたえしとおもへは

かのこよひにと　　花　面影は心にかゝれはゆくとこそ

松　面影はゆめのまくらにまかりけり

かなしみに我か見てやかなしかる

さてもらの我か子といひし

何とまうしよりつね　　那人

松　夕かけはたへてすゝしき

忍　内大臣の心なりけり

玉　糸遊みてよみく

君をうらみてはては

見はいとしうおもひすゝく

かのうらみしにとしゝく

松　相見ずしてしはしは宮にて

久世のこともとまろふく

大和物語より世中をうらみしつゝあはれなりけりといへるに

花　慍いかんへうらこくんかへ

とくれしかる　女子のとくまさへ

中将はうらへいかしへ

中将はかへ行をかけし人　此かたを今源の

玉かつらとうしつさかうつとやすくとへす

わかありけをみしとうすしね

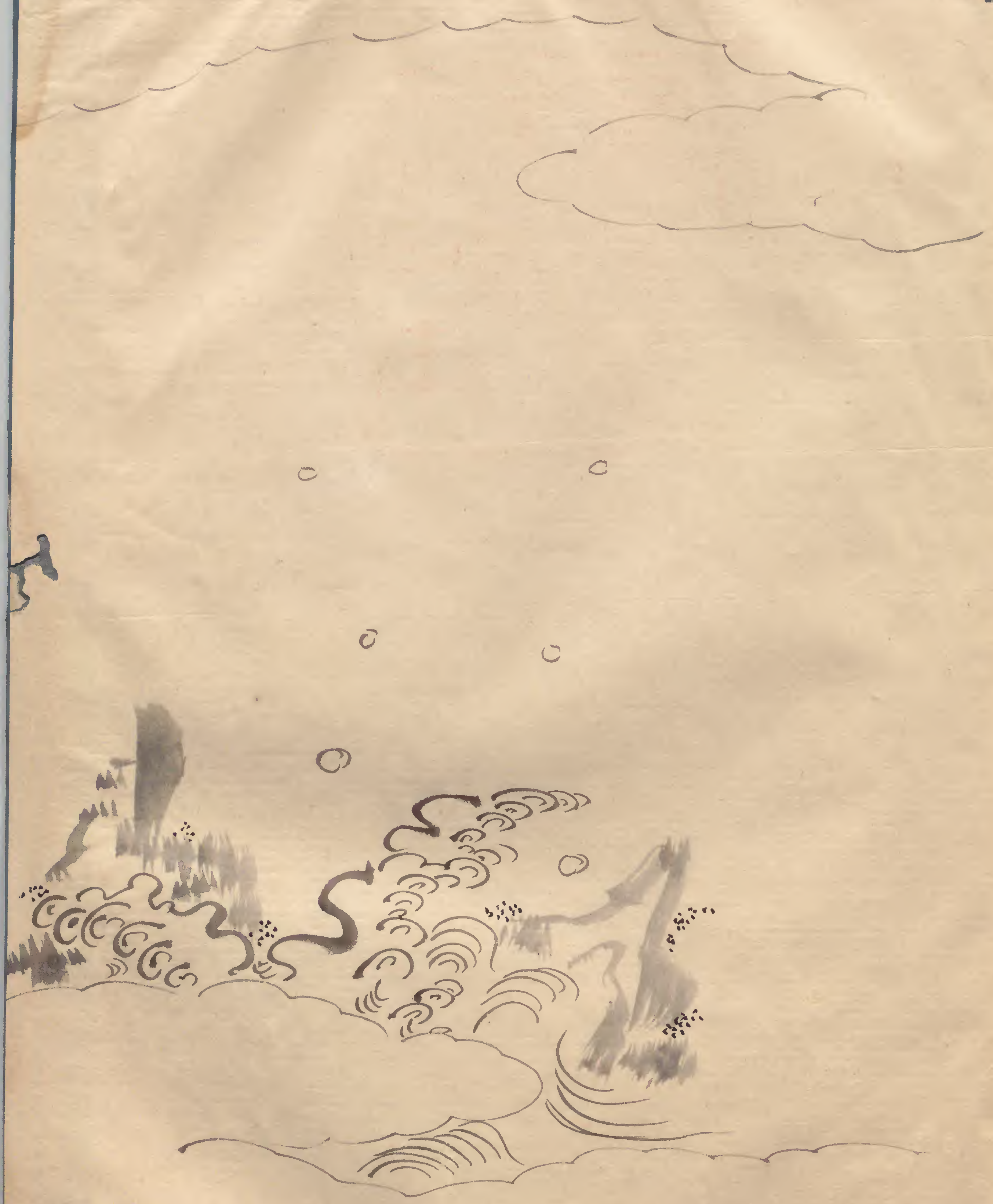
女御姫君かの家にまかりけるをよみしに

松　内大臣の夏人

夏のうたのひとつ

何　毛詩月十一小雅斯干篇　下莞上簟乃安斯寝乃寝乃興乃占我夢維吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆男子之祥維虺維蛇女子之祥

笑　玉かつらたえすそいひわたるかな



大日本帝國圖書

引馬文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan